
違う現代日本に召喚

鬼骨頭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

違う現代日本に召喚

【Nコード】

N1291N

【作者名】

鬼骨頭

【あらすじ】

頭は悪いが運動はできるといふ普通の男子高校生の神野 涼平は放課後、ほぼ完璧人間の親友の岡本 聖一と一緒に下校していた。突如、下校していた涼平達は真っ黒い腕に捕まり異世界に……。この話は作者の自己満足でできています。気に入らない方はボタンを押したり、×ボタンを押してウィンドウを閉じたりしてください。連載は不定期です。

プロローグ

「くあゝ」

俺、神野 涼平は一番後ろ窓際の席で6限目数学終了5分前に大きな欠伸をひとつした。

300秒前・・・

250秒前・・・

200秒前・・・

150・・・100・・・

10・・・9・・・8・・・「神野！外ばかり見てないでちゃんと聞け！」

怒られてしまった。

「テヘッ」

「んーもう可愛いから許しちゃう・・・ってなんでやねん」

おお、ノリッコミーと感心しているよ

「お前さあ・・・成績アレなんだから授業くらいまともに聞け」

「はあゝい。」

「まったく、お前はよう・・・」

と、数学のおっちゃんはブツブツ言いながら出て行った。

おっちゃんと話していたら授業が終わった事に気づかなかった。

みんな帰り支度を済ませていた。

俺も急いで帰り支度を済ました。

俺は下駄箱に急いだ、待たせている人がいるからだ。

「待ったか？」

「いや、それほど待ってない。」

こいつは岡本 聖一、登下校仲間兼親友。

学年主席、運動神経抜群、でも、ちょっとめんどくさがり。

こいつとは中学からのつきあい。あつ、俺達高一だからね。

俺達二人とも両親がいない。

「んじゃ、行くか」

そんなわけで通学路を歩いている。

「あっちいゝ、あと、一ヶ月で夏休みかぁ」

「そうだな。俺は夏の課題に出そうなところ終わらしたぞ。」

「はあっ?!速すぎんだろ」

「そんなことはない。休み中に課題をやるのはめんどくさいからな。」

「じゃあ、俺のを手伝って、頼む!」

「ヤダ、めんどい、自分の課題くらい自分でやれ。」

「そこを、そこを頼むよ」

「ヤダ。」

ちえっ、ケチで冷酷で残酷で鬼畜な奴だ。

「俺はそんな酷い人間じゃないぞ。」

「笑顔で心読むなよ」

あなたのその百点満点の笑顔、怖いです。

「言いたいことはそれだけか?。」

「そう言いながらメリケンサック装備しないでください」

「謝ったら許してやらないこともない。」

「ホントーニ、スミマセンデシタ」

「うむ。」

「ってか、なんでメリケン持ってんの？」

「護身用。」

「ああ、ソウデスカ」

なんて、いつもと変わらない調子で通学路を歩く。

マンションが同じなので分かれる必要もない。

「お前、夏休み中、なんか予定ある？」

「特に無いが。」

「じゃあ、どっかいこうぜー」

「二人だけでか？。」

「それもなあ」

「あてはいるのか?。」

「つか、お前、モテんだから誰か誘えよ」

「めんどい。」

頭良くて、運動できて、顔もイケてる・・・モテない要素がねえ・
・イケメンなんて絶滅してしまえばいいんだ・・・。

「お前を絶滅させるぞ。」

「ヒイツ、スミマセンデシタ」

また、心読みやがって。

「なんか思ったか?。」

「もう、心読むのやめてえ」

なんて、やり取りをしていると

「なあ、聖二」

「何だ?。」

「なんか、前から来てないか?」

「ん〜。なんか黒いのが来ているな。」

俺は目だけは良い。目を凝らして見た。

「なにか分かったか?。」

「ん〜も〜ちよい待って」

確認できた。

「なんだ、アレは・・・」

こっちに向かって来ているもの。それは、不気味な真っ黒い二本の腕だった。

「お、おい逃げるぞ!」

「?なんでだ?。」

こいつはまだ確認できてないようだ。

「いいからっ!」

そう言って俺達は走り出した。

「あれは何だ?。」

聖二が質問してくる。

「あれは手だ手っ！真っ黒い手だっ！」

「本当か？。」

「マジだ、マジ！大マジ！」

「ふむ……。。」

なんでこいつはこんなに落ち着いてるんだ。

「と、とにかく考えている場合じゃねえ！全力で走るぞ！」

「ああ。」

聖二と同じくらいの運動能力があつて良かったとこの時、本当に思った。

十字路を右に曲がる。まだついてくる。狙いは俺達だ。

「まだついてきやがる！」

「まずいな。」

かなり走った。俺達の体力も限界だ。

「うおう?!」

後ろばかり気にしていたせいか、ガードレールにぶつかってこけてしまった。

「いつつうー・・・」

「おい！大丈夫か？。」

「まあ大丈夫なんだけど・・・俺達終わったかもな」

あの真っ黒い手がそこまで迫っていた。

「ああ。もう、どう足掻いても無理だな。」

俺達は死ぬ決意をした。

そして真っ黒い二本の腕は俺達をつかんでこの世界から消えてしまった。

プロローグ（後書き）

駄文ですがよろしく願いします。

第一話

- - - - -
- 視界が真つ暗に・・・

- - - - -
- あっけないものなんだな・・・

- - - - -
- まあ、家族もないし・・・

- - - - -
- 仲の良い奴も聖二ぐらいだし・・・

- - - - -
- もっと遊びたかったな・・・聖二と・・・

- - - - -
- そのくらいかな・・・心残りは・・・

- - - - -
- 死んだら、真つ暗で何も無いところなんだな・・・

- - - - -
- 一人ぼっちで・・・

- - - - -
- 来世があるなら・・・

- - - - -
- ナマケモノがいいな・・・

- - - - -
- 楽そうだし・・・

- - - - -
- 死者の世界みたいなのは無いんだな・・・

- - - - -
- とりあえず・・・

- - - - -
- 寝るか・・・

.....やることないし.....

.....ZZZZZZ.....ZZZZZZ.....

.....

.....『.....!.....!.....』.....

.....『お.....!.....ろ!.....』.....

.....ん?.....なんだろ?.....

.....『おい!お.....ろ!.....』.....

.....誰かな?.....神様にでも呼ばれたかな?.....おろ

つて?

.....『おい!起きろ!.....』.....

.....あゝ.....起きろか.....

.....『おい!起きろ!.....』.....

.....起きろって言われても.....俺、起きてるし.....

.....『つたく.....しょうがない.....』.....

.....何がしょうがないんだよ.....俺、悪くないよ.....

「……………『エナジー・サンダー!』……………」

「……………何、その雷系の魔法っぽい名まどどどどどどどどどど……………」

「うっうっ……………」

「真っ白い天井が見える……………」

「ガバツと体制を起こす。何処かの研究所だろうか？隣には聖二が眠っている。」

「やっと。起きたか。魔法まで使わせおって……………」

「声の主は白衣を着た、黒髪で肌は健康的な褐色をした美女だった。」

「此処は……………？俺は死んだのでは……………？」

「まず、後者から、お前達は死んだのではなく召喚されただけだ」

「召喚？」

「ああ、私達が研究している召喚魔法の実験でお前達は召喚された」

「……………？」

「まあ、無理も無い、あんな腕に追いかけて回されたのだから……………
そして、前者」

「はい、此処は何処っスか？」

「此処は日本だ」

「え？」

少なくとも俺の知っている日本・・・と、いか世界には魔法なんていうものはないんデスケド。

「言葉足らずですまない・・・此処は君達からみれば異世界の日本なんだ」

異世界か、そ〜ゆ〜ことね、ふ〜ん。

「随分と落ち着いているじゃないか」

「いや、俺、家族いないし、大切な人っていうか親友っていうかそーゆー奴はこいつしかいないし、割と大丈夫なんスよ」

聖二を指差しながら言った。

「それで、あんたはなんなんスか？」

「私か？私は日本魔法研究所所長 大谷ナルコだ」

「大谷さん」

「ナルコでいい」

「じゃあ、ナルコさん、俺達はこれからどうなるんスか？」

「まず、君達が召喚されたことは国家機密だ」

「じゃあ、俺達は此処から出られないんスか？」

「そういうわけではない。『召喚』といことが国家機密だ。
・・・そして君達には今から一週間、魔力、体力、健康状態などの検査と

魔法についての勉強をしてもらう」

「検査は分かるんスけど・・・なんで魔法についての勉強を？」

正直、魔法についての勉強はしてみたい・・・でも何故？

「それは、一週間後、君達には年相応の生活をしてもらうためだ、
要は君達を学校に入れると
いうことだ」

「検査終わったら、『この国のために戦ええええ!!』とかじゃないんスね」

「この国は戦争をしてないからな、あと、学費、生活費諸々は国が負担する」

「ありがたいつス」

「住む場所は君達を通うこととなる『国立第一魔法学校』を中心とした町の町はずれだ」

「なんで、そこまでしてくれるんスか？」

「……この国の首相が

『私達がその人達を勝手に召喚してしまったのだから、これくらいしなきゃ悪いでしょ』

って言うから

首相、グツジョブ！

「最後の質問、いいスか？」

「ん、なんだ」

「なんで、俺は電撃喰らって起こされたのに、こいつは起こさないんスか？」

「ああ、それは……あとで隣の部屋に連れ込んで、ゆっくり、時間をかけて楽し……

起こそうと思っていたんだ」

この人、楽しむって言いかけたよね今。

百歩譲って聖二で楽しむのは良いとしよう。

俺よりも聖二が美形なのも分かってるし、良しとしよう。

待遇に差があるのも認めよう。

しかし、その『差』の大きさにも限度があるってもんだろ。

電撃喰らったんだぜ。

下手したら死んじゃうぜ。

仕返ししても良いよね俺。

「どうした？怖い顔して」

なんでこんな顔してるか気づいてねえ、この女。

「フフフツ、ナルル〜コ〜さん、喰らえ軽い復讐！」

そう言って、俺は聖二を起こし始めた。

「おい！聖二！起きろ！起きろ！起きろおおおお！」

「やめてくれ！私の楽しみが！」

ナルコさんは止めに入る、が！

「う〜ん・・・涼平、此処は何処だ？」

「わあ〜ん・・・私の・・・楽しみがあ・・・」

「うお？！マジ泣きしてやがる、よっぽど男に恵まれないようだ・・・」

第一話（後書き）

誤字脱字があるかもしれません・・・

こんな駄文ですがお願いします・・・。

第二話

「ぐず……う……と、とりあえず……家に行きなさい……」

「いや、何処か知らないし」

俺達が知っているわけがない。

「案内、用意してるから……うっ……」

そろそろ、泣き止まないかい？

「入ってきて……ぐず……」

まったく、誰のせいで泣いてるのだろうwww

「はい」

凜とした声が聞こえてきた。入ってきたのは白と黒を基調とした服を着ている女性だった。背が高く、あ、俺達よりも高いんじゃないか？切れ長目の美女だった。しかも、メイドですよメイド。此処は喫茶店ですか？それとも、なんかの会場ですか？何ですか？生徒会長ですか？あはは……

などと考えていると、その美女メイドが口を開いた。

「長井 ツムギ です。よろしく願いいたします」

「この子があなた達の世話することになってるから……うっっ」

泣いてるのはもうスルーで

「神野 涼平 です」

「岡本 誠司 です。」

誠司の奴もスルーすることにしたようだ。あはは、哀れな奴め。

「涼平様と誠司様ですね」

淡々とした口調で言っていた。珍しい、誠司の魅力に惹かれない女性は。たまにはあるんだなあ。大体の女性は誠司釘付けになるから、俺は今、ものすごく驚いている。

・・・以上、俺の親友自慢でした。

「よろしくお願いします。」

個人的にはムギちゃんとよびたいな。

「では、御自宅に案内いたしますので付いてきてください」

「はい。」

俺達二人はそう言ってツムギさんに付いていった。うん、やっぱり、ムギちゃんと呼びたい。

.....

外に出ると俺達は森の中にいた。

「ボード」

ムギちゃ・・・まだ親しくないからな・・・ツムギさんがなんか唱えた。すると、オレンジ色で半透明の板が3枚浮いていた。

「これなんスか？」

俺が質問する。

「ボードという移動用の魔法です、とりあえず、乗ってください」

乗ってみた。もちろん誠司も。バランスは・・・取れるな、よし。

「乗れましたね、では、前に進めとってください・・・あ、遠くに行ってしまうってはダメですよ」

じゃあ・・・少し前に進め！・・・2〜3m進んだ。誠司も同じ感じだ。

「よし、もう大丈夫ですね」

「え？これだけ？」

「はい、これだけです、ほら、見てください」

ツムギさんの視線の方で誠司がものすごくアクロバティックな飛び方をしていた。回転したり、ジャンプしたり、宙返りしたり。

「あのくらいなら涼平様でもできると思いますよ」

「マジデスカ」

「マジです」

うん、まあ、結果から言うことができちゃったんだな。難なくね。楽しいんだよ、これがまた。そして、やっと、家に向かうことになった。

お口アングリ、お目目ぱっちり。流石の誠司もそんな感じだ。だってねえ。俺達の目の前には物凄い豪邸があります。ナ〇お嬢様ん家みたい。うん、本当に〇ギお嬢様の家みたい。んでそこに住めと言われたら、あんな感じになるでしょうが。「此処が涼平様と誠司様のお住まいです」なんて言われたら。ツムギさんに聞いたところ、石油王並みの家だそうだ。マジ、パネエッス、首相さん。

「とりあえず、お二人ともお疲れでしょう、シャワーを浴びて、お眠りになってください」

「分かったス」

「はい。」

各自、決められた自室に入っていく。部屋にはシャワー室が取り付けられていた。とりあえず、言う通りにした。もうベッドの中だ。色々あって疲れた。もう寝ます。お休みなさい。

第二話（後書き）

お久しぶりです。

何故、こんなに遅れたのか？

な、夏の宿題が終わらせていたんですよ。

ぎりぎりまで粘っていたんですよ。

あ、鬼骨頭は中3です。

誤字脱字等あったら、ピシッと指摘してやってください。
お願いします。

第三話

どうも、涼平です。おはようございます。今朝、ムギちゃ・・・ツムギさんに起こされました。

そして、いきなり、「髪を切って、さっぱりしましょう」と言われました。強制的に美容院に連れて行かれました。

自分、実は童顔なので髪を伸ばして顔を隠していたんです。しかも、小柄なのでよく子供と間違えられたりして・・・。童顔で美少年だったらいんですけどね。俺なんて・・・。

だから、髪切るの嫌だったんですよ。もう、ホントに。だからね、抵抗したんですよ。でも、残念ながらね。ガキンチョって馬鹿にされるの、イヤダあああああ・・・っていう願いも叶わず、今、簀巻きで連行されている最中です。車で。

「もう、なんでこんなことに・・・」

「校則に引っかかりますから」

「・・・。」

何故か、さつきから無言の誠司。親友の俺がこんなことになっているのに、何で黙ってるの？俺、髪切るの嫌いだって知ってるよね？

「着きました」

車から簀巻き（俺）を降ろして引きずっていくツムギさん。

「いじつしゃいませ〜」

「予約をしていた者ですが」

「あつ、はい、神野様ですね」

と言いながら俺を個室に連れて行く店員。

「では、終わるまでこちらで待っています」

ツムギさあああん、許してえええ！……って誠司、ため息ついてないで助けるよおおおお！

一時間がたった。終わっただろうか。なんで涼平様は髪を切るのが嫌なのだろうか？誠司様に聞きたかったのだが何か考え事をなさっている様なので聞くに聞けない。何故、顔を隠しておられるのだろうか？昔、何かあったのだろうか？まあ、深くは考えないでおこう。涼平様に対して失礼だからな。

はあ、めんどくせえ。今からのことを考えると。涼平が髪を切ったとなるとマジでめんどい。ホント、めんどい。俺が動かなくちゃいけないからな。めんどくせつ。昔もこんなこと、あつてめんどかつたし。ツムギさんは止めても止まらないし。めんど。はあ……。また、情報収集やら手配やらやんなくちゃいけない。マジめんどい。しょうがないけどな。親友？だし。……。はあ……。

。ヤバイ、私、計画が脳内で、凄く速さで練られていく。うふふ……

はあ……。めんどくせ。ほとんど予想通り。ただ、ツムギさんのタイプが涼平で、尚且つ相当重症ってのが予想外だな。まあ、いいよその位。少し位、痛い目みるよ。俺の労働力のが半端ないから。はあ、めんどくせえ。

帰ってきたぜえ〜マイホーム〜。とりあえず、人目につかないい〜。やった〜。

帰りの車の中が怖かった。助手席にさせられ、運転するツムギさんが時々、獲物を狩る目でこっちを見て、うふふって笑うのが。半端なく怖かった。それを同情するかの様に誠司が見ていた。なんだつたんだろうな。わかんないや。とりあえず、自室にこもる！夕飯いらないって言うてあるからめったに人がこない。心の傷を治すために寝よう。おやすみなさ〜い。

〜夜中〜

うふふ。このドアを開ければ涼平様が……。

相当トラウマになってるな。

「ちょっと、気分悪いから、部屋で休むね・・・誰も入ってきちゃダメって言うておいて・・・」

「鍵をかけておいたらどうだ。」

鍵管理してるのツムギさんだけど（笑）

「うん、そうする・・・」

涼平は自室に戻っていった。

翌朝、ピッキングされたそうです。めでたしめでたし。

第三話（後書き）

この小説は何処へ向かっているのでしょうか？
自分でも分かりません。

次回は過去のことを書こうかと。

ツムギさんはどうにかします（笑）

第四話（前書き）

すみません。遅れました。

過去のこととはもう少し遅れます。

ご了承ください。

第四話

や、やった！

誠司に指紋認証ロックをドアにつけてもらった。

これでツムギさんは、俺の部屋に入って来れない。

やったぜえ！

メイド服とか着なくて済む。

ホントに良かった。

今日は身体検査だっけ？魔力検査だっけ？

「というわけで、魔力検査を行います。会場は研究所なので、研究所に移動します」

ツムギさんが事務的に言う。・・・というか何か機嫌が悪い。

ナンデダロwww

んで、車の助手席に乗せられ（誠司は後部座席）研究所に向かうこ

と10分。

男に縁の無い（笑）所長さんが居る研究所に着きましたとさ。

っづ〜。

第四話（後書き）

短くてすみません。

ちょっと時間無くて。

勝手ですけど、すみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1291n/>

違う現代日本に召喚

2011年10月7日18時54分発行